# 日仏修好150周年記念国際シンポジウム
# 地域における大学の役割－地方分権化と知の役割

## 『日仏修好150周年記念国際シンポジウム』について

愛媛大学において，2008年12月６日に，日本とフランス両国の修好条約締結150周年を記念する国際シンポジウムが開催された。総合情報メディアセンター・ホールには108名の各界からの来場を得て，盛会のうちに報告がおこなわれ，議論が交わされた。フランスからの４人の代表団（ブルゴーニュ大学・パリ政治学院・フランス国立統計経済研究所等に所属）は12月１日に松山に到着し，以後，法文学部総合政策学科，教育学部，松山大学等での催しや研究会合，学生・院生の為の国際交流ゼミなど多彩なスケジュールを日本側関係者と共に精力的になし遂げた。

全体を通して法文総合政策・教育学部を中心に学生・院生諸君の自主的な参加と国際的な対話への積極的な取り組みが今回の催しの特徴であり，全ての行事が終始なごやかな雰囲気のうちにとり行われた。フランス語や英語や通訳を介しての大学教育の現場に密着した国際交流の取り組みは，国際化の新しい状況に対応し，「学生中心の大学」を謳う本学の理念に沿った次世代型のコンセプトを具体的に提示するものである。

シンポジウムの表題にある如く，地域の自律的な発展と地域に拠点をおく総合大学の新たな役割の展開を基軸におく本シンポジウムでの多彩な論点は，今後の本学の研究教育・社会貢献への知的資産となり，また，有力な地域との対話の契機ともなるものである。従って，本年報において，国際シンポジウムのプログラムやレジュメ／報告論文等を出来得る限り詳細に採録（原則として日仏両文において）しておきたいと考えた次第である。

シンポジウムの統轄には本学地域創成研究センター長の宮崎幹朗教授が当り，事務局は，フランス側はブルゴーニュ大学からヴェロニク・パリゾー氏が，愛媛大学からは岡村が責任者として担当することとした。フランス語への邦語レジュメ・論文の翻訳は，主として同僚のエリック・モヴェ氏があたり，仏文論文の邦語翻訳は岡村が担当した（専門用語の翻訳には横山信二氏が協力）。国際シンポジウムを中核とする本記念事業は予想をこえた多くの作業を必要とするものであった。斬新なデザインのポスターやチラシが作成され，当日は本報告にほぼ匹敵する大部の日仏両文からなるシンポジウム基礎資料が参加者に配られた。招聘研究者への公式連絡文の翻訳や航空券・宿舎の確保等，これらの複雑にして膨大な作業を迅速にこなす必要があった。一連の事務局の作業には，モヴェ氏とともに同僚の矢澤知行氏が精力的に取り組んでくださった。また，シンポジウム当日の準備運営には，社会科教育講座の同僚の先生方をはじめ両学部の院生学生諸君の積極的な貢献をいただいた。複雑な事務書類の処理には，本学事務局の日野，赤松両氏が労を惜しまずあたってくださった。忘れてはならないのは，専門外の行政や法律に関わる細かい議論において通訳に当たってくださった小川三枝氏には大変な精神的負担を負わせてしまったということである。深く感謝しておきたい。

当初よりこの取り組みに理解と支援をいただいた小松正幸学長，柳沢康信理事，宮崎幹朗センター長，法文学部，教育学部各学部長をはじめとする各位に敬意を表したい。また，そもそ

もこの様な行事がブルゴーニュ大学と本学との提携関係を軸に可能となったのは，数学分野での野倉嗣紀教授（理学部長）とシモン・ドレツキー教授（ブルゴーニュ大学理学部）との国際共同研究に始まり，理学部が主体となって両大学間の全学提携が実現したことによるものである（2003年に調印・2007年に改訂）。

本学地域創成研究センターは，法文学部総合政策，教育学部，国際交流センターとの協調のもとに記念行事の事務局を主宰し，松山大学，日本貿易振興機構（ジェトロ），愛媛エフ・エー・ゼット（株），愛媛県産業貿易振興協会，伊予銀行の各企業団体のご後援を得て，幸いにして所期の目的を遂げることが出来た。

これらの取り組みが，日仏両国の21世紀における友好協力の更なる発展に寄与し，特にブルゴーニュ大学と本学との大学間組織や教職員・学生院生レベルでの交流提携関係の一層の進展をもたらし，ひいては地域の活性化と国際協調の発展につながるひとつの契機となることができれば誠に幸いである。

（日本側事務局責任者：岡村　茂）

＊ブルゴーニュ大学参加者の所属学部は，正規には「法律政治学部」であるが，簡略に「法学部」と称することがある。

**国際シンポジウムの概略**

---

日仏修好150周年記念国際シンポジウム
愛媛大学・ブルゴーニュ大学交流事業

**地域における大学の役割**
**地方分権化と知の展開**

■日時：2008年12月６日(土)　　13:00～17:00（12:30開場）
■会場：愛媛大学メディアホール（愛媛大学城北キャンパス）
　＊入場自由，通訳あり

開会挨拶　　宮崎幹朗／愛媛大学地域創成研究センター

**第１部　シンポジウム**　　13:15～15:45

(1)　地域における大学の新たな役割
　小松正幸／愛媛大学学長
　　「愛媛大学の取組みの事例と構想」
　オリヴィエ・カミイ／ブルゴーニュ大学法律政治学部・パリ政治学院
　　「フランスにおける新しい大学の自治について」

(2)　地域社会の未来の担い手たち
　フィリップ・イカール／ブルゴーニュ大学法律政治学部
　　「地域社会の将来とその担い手たち：ブルゴーニュ州の事例から」
　清家千尋／えひめ若年人材育成推進機構（ジョブカフェ愛work）
　　「愛媛における若者の雇用の現状」

(3)　地域の活性化と知の展開
　ジャン＝ピエール・ル・グレオ／フランス国立統計経済研究所INSEE

「グロバリゼーション，地域，統計，そして市民への情報公開」
鈴木　茂／松山大学経済学部
「愛媛の地域振興策」

**第２部　パネル・ディスカッション**　16:00～17:00

司会進行　岡村茂／愛媛大学教育学部・地域創成研究センター
　　ヴェロニク・パリゾ／ブルゴーニュ大学法律政治学部
通　　訳　小川三枝

■主催　愛媛大学／地域創成研究センター・法文学部・教育学部・国際交流センター
■事務局
日本側事務局責任者：岡村茂／愛媛大学地域創成研究センター
フランス側事務局責任者：ヴェロニク・パリゾ／ブルゴーニュ大学法律政治学部
宮崎幹朗，横山信二，矢澤知行，モヴェ・エリック／愛媛大学
■後援　松山大学，日本貿易振興機構（ジェトロ），愛媛エフ・エー・ゼット㈱，愛媛県産業貿易振興協会，伊予銀行

---

Commémoration du 150ème anniversaire des relations franco-japonaises.
Coopération entre l'Université d'Ehimé (Japon) et l'Université de Bourgogne (France).

Symposium international

**《Rôle de l'Université dans sa région : décentralisation et développement》**

au campus universitaire Johoku de l'Université d'Ehimé (Media Center Hall),
le 6 décembre 2008 à partir de 13 heures

Allocution d'ouverture

**MIYAZAKI Yoshiro** / Centre de recherches pour l'innovation au sein de la communauté régionale de l'Université d'Ehimé

(1) Réflexions sur le nouveau rôle de l'Université au sein des régions :
—— Le cas de l'Université d'Ehimé.
**KOMATSU Masayuki**, Président de l'Université d'Ehimé
—— Réflexions sur l'autonomie nouvelle de l'Université en France.
**CAMY Olivier**, Université de Bourgogne et IEP de Paris

(2) L'avenir de la communauté régionale et de ses acteurs :
—— L'avenir de la communauté régionale et de ses acteurs : l'exemple de la Région Bourgogne.
**ICARD Philippe**, Université de Bourgogne.
—— Jeunesse et monde du travail à Ehimé

**SEIKE Chihiro**, Centre régional de soutien et d'assistance à l'emploi des jeunes, JobCafé Ai Work

(3) Le développement régional à l'heure de la mondialisation :

—— Mondialisation, territoires, statistiques et information du citoyen.

**LE GLÉAU Jean-Pierre**, INSEE Département de la coordination statistique

—— Politiques pour l'essor régional à Ehimé.

**SUZUKI Shigeru**, Université de Matsuyama

Présidence :

**OKAMURA Shigeru**, Université d'Ehimé

**PARISOT Véronique**, Université de Bourgogne

Interprète français－japonais :

OGAWA Mie, Tokyo

---

## ごあいさつ

本年2008年は，フランスと日本とが修好条約を取り交わしてから150周年にあたります。日本社会の近代化にあたっては，フランスから多くの知の力と，近代国家運営の為のノウハウの継受が必要でした。整然とした法制度や地域行政制度や義務教育制など，多くの曲折を経験しつつ人々は先端的な西欧文明との接触によって近代的なシステムを学び取ったのであります。日本人の鋭敏な感性はいち早くフランスの文芸・美術や近代思想を理解し，自らの文化の発展をも成し遂げました。

時代はかわり，両国の関係にも変化が生じております。フランスの若者たちが熱中するネット時代のクールな文化は，アニメやJポップスをはじめとする日本製の現代カルチャーです。もちろん，両国民の前には先進社会として類似した難問が山積しています。特に，発展途上地域への平和構築の努力や実質を備えた支援外交の展開などは第一に急がれる課題でありましょう。また，先進諸国の特徴としまして，人間存在の基盤としての地域への再評価が意識され，地域にある総合大学の役割の見直しとその働きの強化が強く意識されつつあります。これらは，両国の知的世界に共通する重要な問題意識の一端を形成しております。

私たちは地域における総合大学として，世界と地域の課題をになう多くの優れた人材を社会に送り出してきました。また，ブルゴーニュ大学[1]はフランス南東部に位置する知の大拠点であり，フランス国立統計経済研究所[2]は欧州レベルでの市民のための情報公開と政策の策定に貢献しています。私たちは21世紀の初頭にあって，これまでの研究者レベルでの交流に基づく成果をふまえ，より幅広い対話をもとに，教育研究活動の一層の国際化と国境を越えた市民・大学人と自治体などの関係機関・企業を含めた新しい友好関係のあり方を模索したいと考えています。

---

（1） フランス国立ブルゴーニュ大学は学生数27,000，ブルゴーニュ州の中核都市ディジョンに本拠を置く伝統ある総合大学。2003年以来愛媛大学と全学協定によって提携。

（2） フランス国立統計経済研究所INSEEは統計・経済科学分野の国立研究所であり，パリ本部を中心に職員数2,000名余の主要研究機関。欧州連合EU諸国との連携のもとに福祉・若年層の就業促進など国政レベルの政策の基礎となる諸統計を統括し，各種メディアによって情報公開している。

ここに「分権化時代における地域の活性化と地域における総合大学の存在意義」を問い直そうという緊要なテーマを共有し，両国の識者による市民公開の国際シンポジウムを開催いたします。

## Préface

Cette année 2008 marque le 150ème anniversaire de l'établissement des relations diplomatiques entre la France et le Japon. Le savoir-faire actuel de l'administration japonaise, ainsi que la modernisation de sa société depuis près de 150 ans, doivent pour une part à ces relations.

Grâce à de nombreux échanges entre les deux pays, le Japon, tout en gardant ses caractéristiques culturelles propres, mais en sachant puiser dans certains fondements occidentaux dont français, a pu établir son actuel système législatif régional ainsi que celui de son éducation obligatoire.

Au delà, il existe également et depuis toujours de forts liens de compréhension et de reconnaissance entre les différentes formes d'art et de culture des deux pays. L'engouement de la jeunesse française pour une partie de la culture japonaise, c'est à dire la culture pop avec les mangas et la musique, en est un exemple précis et contemporain.

Certes, les relations entre les deux pays semblent changer et devant de nouveaux phénomènes, chaque université doit prendre conscience de son rôle à essayer de devancer les besoins futurs pour un développement durable. Tant à un niveau national que régional, elles ont pour mission d'évaluer et d'apporter réponses et solutions afin de mieux réformer et ainsi mieux s'adapter à ce monde en perpétuel mouvement. C'est un défi commun à nos deux pays.

Comme depuis 150 ans et pour que cela perdure au-delà de ce début de 21ème siècle mouvementé, cela semble être un devoir, pour les relations entre générations futures, de continuer à coopérer de façon active. Ce faisant, nous proposons un symposium ouvert au public, qui permettra de présenter le fruit d'un travail mené en collaboration entre deux groupes de recherche, l'un français et l'autre japonais, sur la question du rôle des universités au sein de leur région ainsi qu'à une étude comparative de la décentralisation en France et au Japon.